

九州バス旅 2023



2023 年 6 月

旅のチカラ研究所 植木圭二

九州一周のバス旅に旅仲間たちと行ってきた。テレビのバス旅番組のように乗り継ぎには苦労したが、ユニークな温泉、豪華なグランピング、老舗旅館など変化に富んだ宿に泊まった。珍道中でありながらも大満足な旅になった。

第一章 福岡から始まる

■九州再発見の旅へ

4 月のある日、「コロナの終息も見えてきたから、どこかに行きたいね」という旅の誘いが旅友からあった。私は「是非、行こう」と返すと、その日のうちに日程とメンバーが決まった。

このスピード決定は皆が旅に出たくてうずうずしていたことを端的に表している。そして何処に行こうかということになって、行先については私に一任された。私は 2~3 日考えた末に九州の旅を提案した。

同行が決まったメンバーは 4 人で、そのうち 2 人が福岡県に住む女性のタヅさんとコマちゃん、そしてシロちゃんは山形県に住む男性で、私は神奈川県に住んでいる。

普通に考えれば行先は中間の関西辺りに落ち着くが、私は敢えて九州を選んだ。中間を選ぶと結局どちらから行くのも大変になるからだ。福岡の 2 人については九州再発見をテーマに考えれば良く、再発見のための SUNQ（サンキュー）パスは地元九州の人でも案外知られていない。

SUNQ パスとは、九州のバス乗り放題のチケットで、南・北九州や九州全域、期間は 3 日間もしくは 4 日間のものがある。とても便利なチケットでそのエリア内ならば市内の路線バスも高速バスも使える。九州は高速バス網が発達しているので各県を跨ぐ移動にも適している。

このチケットは私も過去に使ったがとても便利だった。今回は九州全域で 4 日間のものを使うことにした。価格は 14000 円、なかなかお得なチケットになっている。

■バス旅が始まる

バス旅の始まりは朝 7 時の博多駅バスターミナル、ここから大分行きの高速バスに乗り込む。

博多から大分まで 2 時間半ほどで行くことができる。もちろん特急列車もあるが、時間は同じくらいなのに費用は 6000 円前後かかる。バスはその半額の 3250 円で行くことができるので、SUNQ パスならこれだけで 1 日分の元がとれてしまう。

私たちを乗せたバスは福岡県から大分県に入り、山の中の高速道路を走っていると由布岳が見えてくる。隣に座ってうとうとしているシロちゃんに「由布岳が見えてきたから、そろそろだね」と声を掛け、「それにしても山ばかりだね」と付け加える。彼は「おらのところには由布岳はないけど、山の景色は山形とおんなじだね」と山形弁で返してくる。彼は山形で農業しており、時おり見せるその棒突さが女性陣に受けている。

大分市要町のバスターミナルに到着する。バスターミナルというから少しは気の利いた商業施設があるかと思っていたが、商業施設はなくベンチがいくつか置いてあるだけのシンプルなバスターミナルになっている。

喫茶店に入ろうという気持ちを抑えながら、大分駅が近いのでそこでおにぎりを買い、バスターミナルのベンチに座って朝食兼昼食にする。



【大分市要町のバスターミナルにて集合写真】

ベンチで談笑をしていると若くて可愛いお姉さんが近づいてきて「熊本行きのバスはここですか？」と少しアクセントが違う日本語で聞いてくる。熊本行きのバスには私たちも途中まで乗るので、私は「あのバス停ですよ」と言って目の前のバス停を指差す。さらに「外国の方ですか？」と質問を返すと、彼女は「シンガポールです、ありがとう」と言って去ろうとしていたので、私は彼女に「Have a nice trip」と言うと、彼女は笑顔で応えてくれる。

コロナが終息して外国人観光客いわゆるインバウンドが増加しているというニュースを耳にするが、ここでも実感することになる。

■旅の目的はさまざま

熊本行きのバスに乗り込み、私は通路を挟んだ隣の席に座った若者と話を始める。彼は鉄道マニアで日本中の鉄道を制覇しようとしており、当然のように鉄道の話で盛り上がる。

昨年開業した長崎新幹線の話になる。実はこの新幹線はもっと早く開業するはずだった。それは 1978 年に密約が結ばれたからだ。密約は原子力船むつの修理の見返りに新幹線を早く着工させるというものだったが、結果としてそれは実現しなかった。彼はその密約を知っていたから恐れ入ってしまう。（詳細は旅行記「北東北の旅 2022」の第六章を参照）

私たち 4 人は竹田でバスを降り、彼はそのまま旅の目的地に向かう。2 つの旅が交差する一瞬の出来事だったが、実に楽しい時間を過ごすことができた。

竹田で路線バスへの乗り換え時間は 30 分、その時間を使ってバス停の直ぐ前にある古い寺を拝観する。昔は相当立派な寺だったらしいが、今は部分的に朽ち果てているのが郷愁を誘う。後継者不足なのだろう。私は少し寂しい気持ちになる。

その寂しさを他所（よそ）に、近くの畑で農作業をしている人にシロちゃんが声を掛けて根掘り葉掘りと聞いている。それは作物の品種や収穫時期などに始まり、肥料などの専門的な話になっている。九州の農業視察だろうか、こういう旅の目的もあるのかと感心してしまう。

第二章 大分県 長湯温泉

■長湯温泉

3 本のバスを乗り継いで最初の目的地の大分県の長湯温泉に到着する。バス料金は普通に払えば 5880 円だったので、改めて SUNQ パスの効果を実感する。

その一方でバスの乗り継ぎが悪いのも実感する。長湯温泉に着いたのは午後 1 時半、こんな早く着いたのは長湯温泉まで到達するバスが 1 日 1 本しかなかったからだ。それは本日が日曜日ということにも起因しているが、今回の旅は乗り継ぎがキーポイントになる予感がしてくる。

長湯温泉は福岡に住む女性陣も知らなかった小さな温泉で、なぜ私がそんな温泉を今回選んだのかには理由がある。それは数年前に行った海外旅行で添乗員と話をした際に長湯温泉の話題になった。しかしその時の私は長湯温泉を知らなかったので、添乗員から「長湯温泉を知らずして温泉は語れませんよ」と言われてカチンときて、いつか訪れようと心に刻んでいた。

まずは観光案内所に立ち寄る。事前に調べた限りでは長湯温泉は泡の出る炭酸泉で有名だが、泡の出方がまちまちで、立ち寄り可能でたくさんの泡が出る湯を聞く必要があった。

窓口のスタッフは地図を開きながら「長湯温泉で泡が多く出る湯は 2 つしかありません、ひとつはラムネ温泉館、そして〇〇湯ですね」と言っている。私はラムネという名前に魅かれながら、「なぜ 2 つしかないのですか？」と聞くと、「温度が高いと泡が無くなるので、湧出温度が高い源泉や加温している湯は泡がほとんど出ないのですよ」と、分かり易い説明を聞く。

■ラムネ温泉

泡が多いという日帰り入浴施設のラムネ温泉館にやって来る。日曜日の午後ということもあって、観光客や地元の人たちが多く訪れている。やはり人気があるのだろう。

奇妙な、いや神秘的とでもいうのか、何とも表現のしようがない建物が建っている。建物は基本的には平屋だが、部分的に四角いサイロのような塔がニョキッと出ている。その塔の上には木の枝のようなものが出ている、いや生えているという感じだ。屋根以外の部分は縦縞の模様が入っており、それも特徴的だ。



【ラムネ温泉館の建物外観 サイロのような塔の先に枝が見える】

入口には看板があり、ラムネをモチーフにした入浴シーンのポンチ絵がとても面白い。

中に入ると内風呂には浴槽が 3 つあって、少しずつ温度が異なる。自称人間温度計の私の推定では 40℃～42℃だろう。浴槽はカルシウム質の石灰岩でできており、そこにやや白濁した湯が満たされている。そして先ほどの観光案内所で聞いた話を思い出し、この温度では泡はほとんど感じられない。

そして建物を外から見た時に塔の上に枝が生えているように見えたものの正体が判明する。浴槽の脇に細長い木が生えていて天井の上の方まで伸びている。この木の最上部の枝が塔の上に出ていたことになる。実に気の利いた、いや木の利いた演出だ。



【ラムネ温泉の看板】

露天風呂があり、横長の 8 畳間くらいの木枠で囲われた浴槽には 15 人くらい先客が湯に浸かっている。どうやらここがラムネ温泉の核心部分らしい。

ゆっくりと体を浸ける。35℃以下だろうか、体温よりも低い温度になっている。体に小さな泡がまとわりつき、それを手のひらで撫でて泡を無くしても、その後にまた泡がつくという、あの感覚だ。最近のスーパー銭湯では人工炭酸泉があるのであまり珍しく感じないが、昔は相当に珍しかったに違いない。

浴槽の底の隅の方には源泉を注入するパイプがあって、そのパイプから泡がボコボコと勢いよく出ている。これぞ炭酸泉、ラムネ温泉だ。

強力な泡の湯に浸かっていると何となく体に良さそうな気がしてくる。

炭酸ガスが多く含む湯は心臓病に効果があるとされている。入浴することにより体内に炭酸ガスが吸収され、それが全身の血管を拡張して血流を促進するため血圧が下がり、それによって心臓の負担が減少することで心臓の働きが改善されると言われている。温度が低いので長湯することになるが、長く浸かるので効果が上がるということらしい。

ラムネ温泉の出口で女性陣と待ち合わせをしており、少し待っていると 2 人が出てきた。入浴前にコマちゃんは「私はカラスの行水をモットーにしているから早いよ」と言っていたが、その彼女は「もう少し長く浸かっていたかった」と開口一番言うてくる。私は「だから長湯温泉と呼ばれているのかも」と言うと、彼女は腑に落ちたようだ。

私たちはラムネ温泉の看板のポンチ絵に向かって軽く頭を下げた立ち去る。

■神社で乾杯

ラムネ温泉を堪能して、私たちはこの温泉地に一軒だけあるというコンビニにやって来る。買うのはビールとつまみ、そして夜に備えての焼酎だ。

ビールは最初一杯にはこだわりがある人が多いので、各自飲みたい銘柄を手にとってカゴに入れる。私はもちろんエビスビールだ。タツさんは「私は“500 の会”だから」と言いながら冷蔵庫の扉を開ける。私が「500 の会、何それ？」と聞くか聞かないかのうちに彼女はロング缶を取り出し「これが 500 の会の会員証よ」とさらりと言っている。

500 の会の会員は 500ml のロング缶を飲むらしい。シロちゃんも「おらも 500 の会に入会だ」と、山形弁でボソリと言ってロング缶を取り出す。私とコマちゃんは顔を見合わせて「我々も入会だ」とレギュラー缶を元に戻してロング缶をカゴに入れる。

コンビニを出てすぐ近くの公園にやって来る。公園内には古い神社があり、由緒正しい神社のようで古いながらも神楽殿がある。泡の温泉の後は泡の飲み物が合いそうなので、その神楽殿の舞台に腰掛けて、“プシュ”という音とともにまずは乾杯をする。風呂上がりの一杯は格別だ。皆、いい顔で飲んでいる。シロちゃんが「おらも 500 の会に入会して良かったよ」と山形弁で言いながら飲み干した。

神楽殿の飲み会の後は、公園の近くの河原にある「ガニ湯」に立ち寄る。蟹の形をした岩の浴槽がポツンとあり、誰でも入れる無料の露天風呂になっている。



【古い神社の神楽殿で一杯】



【ガニ湯】

そこには立て看板があり、ガニ湯の由来が書かれている。その内容が実に面白い、いや突拍子もないと言った方が良いでしょう。

昔この村に大きなガニ（蟹）が住んでいて、川のほとりの湧き湯で湯浴みをしている村の美しい娘に見とれてしまった。ガニは何とかしてその娘を自分の嫁にしたいと思うようになった。近くの寺の僧がそれを耳にして、「鐘の音を百回聞けば、おまえは人間に生まれ変わる」と言い聞かせた。ガニは娘が湯浴みに来た時に僧がつく鐘の音を聞いていた。しかしその僧も娘の湯浴み姿を見て一目ぼれしてしまった。そして 99 回までついたところで、僧は「この娘はワシがもらう」と言った。そのとたん空はにわかには曇って大雨になり、すさまじい音を立てて雷が落ち、僧もガニも雷に撃たれて死んでしまった。水が引いた川の中にあのガニの形をした大きな岩が現れ、中から無数の泡をともなった湯が湧き出た。

■かじか庵

長湯温泉の今宵は、小さな川の畔にある「かじか庵」に泊まる。今回、私がこの宿を選んだのにはそれなりの理由があり、それはこの施設が温泉、食事、宿泊を分離していることだ。

一般的に温泉旅館と呼ばれる施設は温泉入浴と食事と宿泊とが一体になっている。このスタイルにケチをつける気はないが、それなりに問題がある。

その昔、温泉は日帰りの温泉入浴のみだった。やがて宿泊という付加価値をつけて泊まれるが、食事は宿泊客が自炊する湯治場になった。さらに食事という付加価値をつけたのが温泉旅館で、今日の一般的なスタイルになっている。

しかしこれが今となっては宿にとってかなりの負担になっている。今さら書くほどでもないが、部屋の掃除、夕食の仕込みと提供、布団敷き、夕食の片づけ、就寝後も何かあれば起こされ、翌朝も早くから朝食の準備やら 24 時間対応になっている。いろいろ付加価値を付けた結果、労働時間過多になり、従業員不足や後継者不足に追い込まれている。

事実、最近までペンションを営んでいた友人は、この 24 時間対応が本当に大変だと言っていた。

ところが最近の草津温泉や城崎温泉などの有名温泉地では、このスタイルに変化が生じている。それは意図的ではないかもしれないが、入浴、食事、宿泊が分離されている。分離することによって各施設の専門性が高まり質も向上する。特に食事の分離は効果が大きい。最近のお客はグルメブームもあって旅館が用意したお決まりの豪華料理ではなく自分の好きなものを食べたい人が多い。あるいは安く済ませたい人もいる。さらに夜遅くのチェックインも可能になり時間の自由度が高くなる。それらの理由で素泊まりや朝食付きの宿が若者や外国人に人気がある。

宿にとっては食事がなければ、板前や仲居はもちろんのこと食材の仕入れも不要になる。もちろんその収入減を補う工夫は必要だが、有名温泉地では様々な工夫がなされている。

もっともそれは有名温泉地の集客力があるから成せる業かもしれない。しかし逆に考えれば変化に対応したから有名温泉地として生き残り、これからも生き残っていけるのだろう。

話をかじか庵に戻すと、この宿は日帰り入浴施設、食事処、宿泊棟が別々に存在しており、渡り廊下で行き来できるようになっている。宿泊者は入浴料金込みなので普通に入浴できる。食事処では各種料理や定食が食べられて、部屋付けで現金精算の必要がなく何時に行ってもよい。宿泊部屋への食料の持ち込みも許しており、自炊こそできないが部屋には冷蔵庫もある。

各施設は個々に利用可能で、これは画期的なシステムといって良いだろう。そしてそれを大規模な温泉地ではなく、この小さな（失礼）長湯温泉で実践しているところに私は驚いてしまう。

今宵、私たちはその食事処で夕食を食べる。メニューはひと通りそろっており、かつ丼でもラーメンでも何でも選べるが、私はヘルシーで田舎料理も味わえる麦とろ定食を注文する。1100 円だが、必要にして十分な内容だ。山奥の温泉地で魚貝類の刺身などが出てくると興ざめするが、ここではその心配もない。もっともメニューには刺身もあるので、食べたい人は注文すれば良いだけだ。



【麦とろ定食】

この宿は湯、食、泊の分離は特徴のひとつだが、実はこだわりは温泉にある。

ラムネ温泉ほど泡は出ないが炭酸成分は一応入っている。しかし何よりも温泉の鮮度を大切にしている。温泉に鮮度があることを知らない人も多いかもしれないが、時々行う私の講演で話す内容を以下に紹介する。

金属が酸化して錆びるように人間の皮膚も酸化つまり老化していく。そして酸化とは逆の還元は老化を抑制して若返り効果が期待できる。温泉は地中深く生成されるために酸素が不足した還元状態にあり、それゆえ新鮮な湯に浸かれば若返りが期待できる。その還元状態の新鮮な湯は地上に出て大気に触れると酸化が始まり徐々に鮮度が落ちていく。必ず空気に触れるので鮮度が落ちるのは仕方ないが、鮮度を保つためには空気に触れさせない工夫が必要になる。

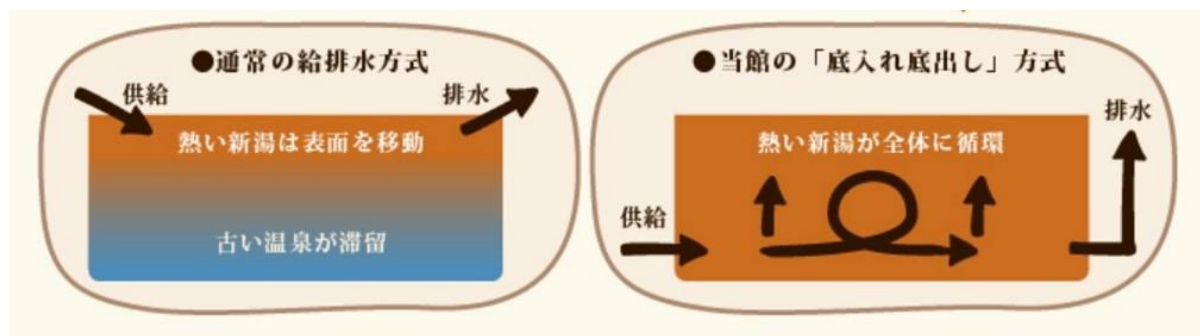
かじか庵では鮮度維持のために「底入れ・底出し」方式を採用している。

一般的に湯の注水口は見た目の雰囲気醸し出すために水面の上にあり、パイプや岩の間などから浴槽に注ぎ込まれる。しかしかじか庵では注水口を浴槽の底面に設けて、新しい湯を空気に触れることなく供給している。

排水は浴槽から溢れ出させてかけ流しを演出するのが一般的だが、温度の高い新しい湯は水面に上がるために直ぐにその新しい湯が流れ出てしまうことになる。つまり古い湯がいつまでも浴槽の底に滞留してしまう可能性がある。これに対してかじか庵では底からお湯を排出するように底に排水口がある。結果的にかけ流しの温泉は常に新鮮な状態に保たれている。

そんな話を温泉に浸かりながら壁の説明書きを見ながら入浴客と話をしていたら、その中にやけに詳しい人がいる。

詳しいはずでその人は宿の主人だ。彼は「この方式は鮮度以外に温度にも有効で、標高 500m のこの地では湧出温度 46℃の湯では冬はすぐに冷めるので、真冬は露天風呂への給湯を犠牲にして高温で鮮度の高い湯を内風呂に集中させています」と教えてくれた。



【通常の給排水方式 vs かじか庵の底入れ底だし（宿のHPより）】

その新鮮な湯に浸かり、夜は旅友との語らいが始まる。もちろん話題は温泉の話、旅の話、旅友との交友の話で盛り上がる。

第三章 鹿児島へ

■鹿児島へ

2 日目の朝、農業男児のシロちゃんはさすがに早起きで、もう一仕事してきたような顔をしている。彼を誘って朝湯に行き、部屋に戻って“プシュ”とやる。食事処で待ち合わせしている女性陣と合流して朝定食を食べて宿を後にする。

熊本にやって来る。次のバスまで時間があるので、時間つぶしに近くのスーパーマーケットに入りうろちょろしていると、畳1枚分くらいの大きな看板が立っている。

その看板を覗き込んでいるシロちゃんが目を丸くしている。それは山形のサクランボの予約販売の看板で、彼は一言「おらたちの出荷価格よりも遥かに高い。それも一桁くらい違う」とつぶやいている。自分たちが作っているサクランボが九州ではそんな値段になっているとは夢にも思わなかったようだ。

彼は興奮を隠せずに、看板の写真を撮って山形の同胞たちに送っている。

私が「農協は市場価格を教えてくれないの？」と聞くと、彼は「3～5倍くらいになっている」とは聞いていたが、ここまでとは・・・」と若干肩を落としながら答えてくれる。自分たちが精魂込めて作ったものが高く売られているのは悪い気はしないだろうが、消費者に届く段階でこんなに高くなっては一体誰が利益を得ているのか、やり切れないのだろう。

女性陣は「それを知ることができて、九州まで来た甲斐があったというものね」と極めて冷静な対応が面白い。

ここから鹿児島を目指すが、鹿児島市内には明るいうちに着かない。そこで私が今回取った秘策は鹿児島空港行きのバスに乗ることだ。運よく鹿児島空港近くには霧島温泉郷があり、その中の温泉宿「こしかの温泉」は鹿児島空港から宿の無料送迎バスもある。

■グランピング

こしかの温泉に到着する。今回この宿に泊まる最大の理由はグランピング（glamping）ができることだ。グランピングとは“優雅な”という意味の glamorous とキャンプ（camping）を合わせた造語で、文字通り豪華キャンプのことで、最近はかなり流行っている。

実はキャンプ 350 泊以上の私にしてもグランピングは初体験だ。だから一般的なグランピングを知る由もない。従ってここからは、こしかの温泉のグランピングについて書くことになる。

まず特徴的なことは完全なプライベート空間が提供されていることだろう。他の宿泊客や宿のスタッフとはチェックイン・チェックアウトの時以外には顔を合わすことがない。

そのプライベート空間は塀で囲まれており、塀の中は簡単に言うと 3 つに分かれている。ウッドデッキ、ダイニングキッチン、水回りスペースになっている。

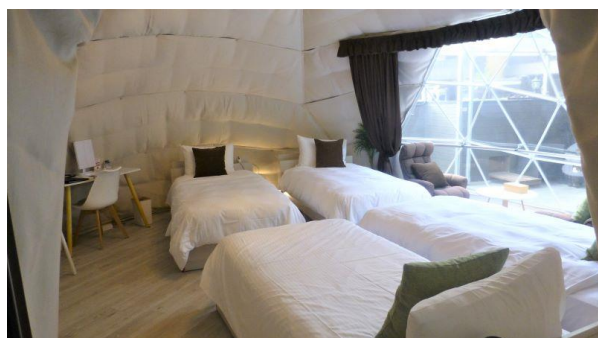


【グランピングの空間 左がダイニングキッチン、右はドームテント、手前が焚火スペース】

ウッドデッキには直径 6m の大きなドームテントがあって、解放感を演出するためにテントの 1/3 くらいは透明シートの窓でできている。テントなのに冷暖房が完備されており、立派なシングルベッドが 4 台と、2 脚の椅子と小さなテーブルもある。

ウッドデッキの残りの部分には焚火用のスペースがあって、結構広くてテントと同じくらいのスペースを確保している。焚火をするので床はウッドではないが耐火ボードのようなものでできている。そこに石で作った焚き火用の炉がある。上を見上げると雨や雪が降っても焚火ができるように屋根があって、屋根はシートで出来ているので簡単に開閉できる。もちろん焚火の上になるので耐火シートなのだろう。

ダイニングキッチンがアメリカンサイズと言うべきか、それなりに広い。テーブルと椅子、大きな家庭用冷蔵庫と小さめの冷蔵庫、シンク、大きなガスの BBQ コンロがある。

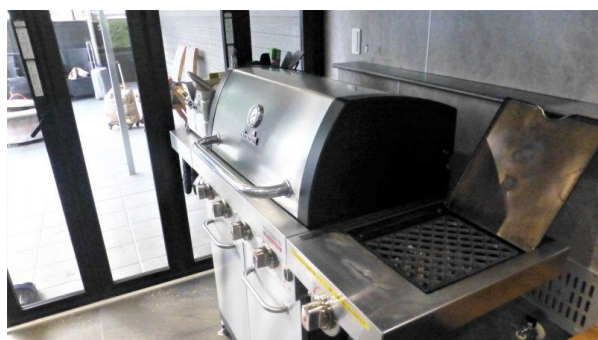


【ドームテントの中 ベッドと応接セット】



【ダイニングキッチン】

私たちが最も驚き感激したのはその大きな冷蔵庫の中身で、ビールや酎ハイ、ソフトドリンクなどが詰まっており、それらは全て飲み放題になっている。それも発泡酒などではなくエビスやプレモルなどの高級ビールがそろっている。その本数は 500 の会のメンバー4 人でも飲みきれないほどだ。隣の小さめの冷蔵庫の中身は有料だが、ワインや地酒などの高級品がいっぱい詰まっている。



【BBQ コンロ】

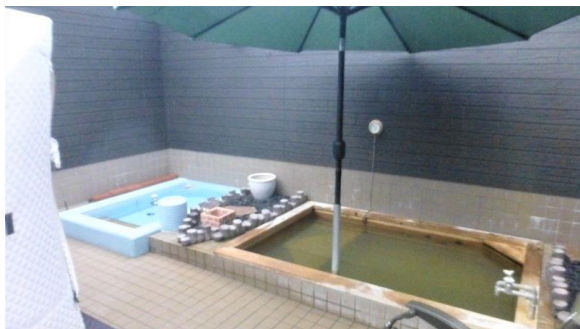


【冷蔵庫の中 飲み放題のドリンク類】

さらに冷蔵庫には飲み物以外に BBQ の材料の肉や野菜がたんまりある。実は予約の時に肉の量が多いのでフードロスをなくすために食べる量を教えて欲しいと言われ、少なめに頼んだ。その他に冷蔵庫の中には調理済で温めるだけのパエリア、翌日の朝食のためのソーセージ、サラダ、味噌汁、米やパンまで用意されている。米は 3 合あり、自分たちで炊飯して下さいとのことらしい。もちろんそれらの道具や食器類、調味料などは全てそろっている。

水回りスペースはダイニングキッチンと同じ建物にトイレと洗面所がある。洗面所の奥に脱衣所があり、そこから中庭に出ると露天風呂がある。2～3 人用の露天風呂だが、温泉がかけ流しで用意されており、やや茶褐色で白濁した湯で満たされている。湯船の上には大きな傘が開いており、直射日光や雨をしのげるようになっている。

驚いたのは露天風呂の隣には 2～3 人用のテント製のサウナがあり、中にはサウナストーンがあって、蒸気を出すためのロウリュウのアロマ水も用意されている。もちろん水風呂もある。そしてサウナ後に“ととのう”ためのリクライニングチェアも 2 台置かれている。



【温泉露天風呂と水風呂】



【テント製サウナ 中のストーブ】

これは至れり尽くせりだ。グランピングがこんなに凄いものなのかと改めて感じる。いや、世間一般のグランピングを知らないので、こしかの温泉のグランピング設備は相当にやばい。

■グランピングを楽しむ

設備をひとつとおりチェックした。その結果、皆のテンションは最高潮になり、飲み放題の冷蔵庫からエビスビールを取り出して乾杯する。ハイテンションの勢いそのままに、実に美味そうに飲み始める。それはまさしく至福の時と言うものだろう。

全員のテンションが高い中、特にシロちゃんが張り切っている。彼は「BBQ はオラに任せろ」と言って、乾杯のビールを飲み干すか干さないかのうちに BBQ コンロに火をつける。

実は、彼はその BBQ コンロを買おうと考えたことがあったと言っている。アメリカ製で結構な値段だったので費用対効果を考えて断念したとのことだ。そのコンロが目の前にあって、美味そうな食材が焼いてくれと言わんばかりに用意されているとなれば張り切るのも無理はない。

シロちゃんが何から焼こうか迷っていると、女性陣がアヒージョを見つける。鉄製の薄い鍋に入っており、コンロで熱すれば食べられるようになっている。女性陣は「宿もなかなか洒落た演出をしてくれるわね」と言っている。



【BBQ の材料】

そしてホタテや海老などの海鮮類を焼き、その後はいよいよ野菜と肉の番になる。肉は牛ステーキ、牛たん、ホルモン、豚カルビ、鶏肉と実に豪華だ。

皆がビールを飲み、シロちゃんが肉と野菜を焼く。皆がそれを食べ、そしてビールを飲む。それを何回か繰り返し、野菜は終わるが、肉とビールはまだまだ残っている。

ダイニングルームから外を眺めると小さな川がある。BBQは河原でするのが相場だが、今は窓越しに川を見ながら洒落たアメリカン風ダイニングルームの中にいる。大きな高級コンロで食材を焼き、エビスビールを飲んでいる。まさしく非日常の贅沢極まりないBBQをしている。

しかし私たちの胃袋もそろそろ限界に近づき、「無理しない方がいいよ、旅はまだ続くから」と誰かが言うと、その言葉に他の3人も反応してBBQを一旦終了する。

暗くなってきたので外に出て、いよいよ焚火がスタートする。

私は「焚火なら、任せてくれ」と言って、火つけ役を買って出る。私は毎年、冬の猪苗代湖に極寒キャンプに行っており、そこで鍛えた“火つけの妙技”を見せてやろうと意気込んでいたが、焚き火用の炉の中を見て驚く。薪が“井ゲタ”状に3段組まれており、燃え易い小枝や枯葉が真ん中に入っている。これなら誰でも一発で火をつけられるのは間違いない。

私は井ゲタの3段組に感激しながらも、3人に対しては「焚火は最初の火つけが難関で、ここが勝負どころなんだよ」と得意げに話しをしながら火をつける。そして案の定、着火は短時間で成功して大きな炎になる。農業男児のシロちゃんは木組みを見て察していたようだが、女性陣は「さすがキャンプの達人!」と感激して褒め称えてくれる。私は少し演出が過ぎたかなと反省しきりだ。



【焚火とドームテント】

焚火が始まる。炎が揺れている様子が何ともたくましく、とても感動的だ。焚火にはいつも感動を覚えるが、今宵の炎はドームテントを背景にしており、いつもよりもさらに特別なものを感じられる。それはドームテントがまるで宇宙船にようで、その前に原始的な炎があるというマッチングが素晴らしいからだろう。

火は人類が最初に覚えた道具だ。その道具は単に動物を威嚇することや捕獲した動物の肉を焼くだけでなく、夢も与えてくれる。そして今宵の炎は私たちが非日常の夢の世界にいざなってくれる。そして夢の世界への旅は、夜遅くまで続いた。

深夜 0 時を過ぎて就寝したが、朝は早く起きる。まずは入浴、そしてビールを“プシュ”と開ける。昨夜食べられなかったパエリヤを温めて、野菜サラダとともに朝食にする。残念ながら肉は焼かずに冷蔵庫に残し、ビールも飲みきれなかった。500 の会でも歯が立たなかったか。

第四章 熊本から長崎へ

■熊本と言えば

3 日目、鹿児島から再び熊本に戻ってくる。

熊本と言えば熊本城、車窓から見る天守閣は 7 年前の大地震から復旧しているように見えるが、城全体の復旧は計画の 2 割ほどの進捗だという。復旧計画全体の見直しが昨年行われ、工期が 15 年延長となり 2052 年までかかる見通しになったという。

「熊本と言えば太平燕(たいぴーえん)が有名よ」と言っているのはタヅさんで、「熊本に来たら太平燕を食べないわけにはいかないのよ」と付け加え、彼女の先導でバスターミナルのビルの中にある中華料理店に入る。

太平燕の見た目はタンメンだ。しかしタンメンと決定的に違うのは麺に春雨を使っており、スープの味は長崎ちゃんぽんに近い。私は初めて口にするが春雨の食感も面白くなかなか美味い。



【太平燕】

■5 分間の勝負

今回の計画は、熊本港からフェリーが出ているのでそれを利用して有明海を渡って島原港に行き、港でバスに乗り換えて島原半島の反対側の海に面した小浜温泉に行くことになっている。実はそのフェリーも SUNQ パスが使えるので、全て陸路で行くよりも海路も面白いだろう考えた。

しかしこのフェリー計画には多少リスクがある。島原港にフェリーが到着する時刻に対して島原港からバスが発車する時刻はその 5 分後、つまり乗り換えの余裕は 5 分間しかない。

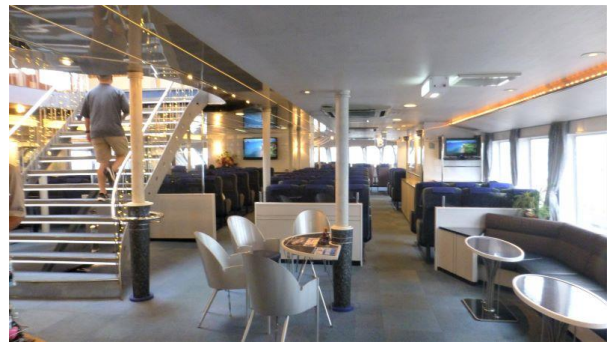
とは言っても通常は船の到着を待つバスが出るはずなので、私は事前に船会社に電話を掛けて確認すると意外な答えが返ってきた。「待っていてくれないのですよ、バス会社には何度も申し入れています、良い返事をもらえず、間に合わないこともあります」と少し泣きが入っていた。同様の質問をバス会社にしても表現こそ違うが回答内容は同じだった。

これには少し躊躇したが、九州再発見するために SUNQ バスを最大限に活用することを優先して、ここは運を天に任せて勝負することにした。もしも間に合わなければタクシーでバスを追うことにしてタクシー会社にも電話して、港に待つタクシーの台数も確認した。

そして計画通り、熊本港からフェリーに乗り有明海を渡る。船はオーシャンアロー号という高速船でなかなか豪華だ。私たちは 56 日間のオセアニアクルーズで知り合ったので例え 30 分間でも船旅への思い入れは強い。天候はあいにくの雨模様だが、皆の心は快晴で久しぶりの船旅に興奮しているようだ。



【オーシャンアロー号の船体】



【オーシャンアロー号の船内】

到着時刻が迫ってきたので、私たちは甲板の下船口の先頭に陣取って下船を待つ。しかし到着時刻 5 分前なのに船はまだ港の中にも入っていない。そして到着時刻になったが、接岸のためのロープも投げていない。到着時刻を 5 分過ぎてようやく下船が始まる。それはちょうどバスの発車時刻で、バスに遅れがなければ発車しているはずだ。

下船したが、やはり間に合わなかったようでバスの姿はない。

■バスを追ってくれ

私たちはタクシー乗り場の先頭で待機しているタクシーに飛び乗り、助手席に座った私は「今しがた出て行ったと思うバスを追ってくれ」と運転手に頼んだ。

運転手は最初何を言っているのか理解できなかったようだったが、事情を話したら運転手は覚悟を決めたようで、「任せて下さい、警察に捕まらないように飛ばしますから」と頼もしい言葉が出てくる。

タクシーはアクセルを踏み込んでスピードを出してくれるが、田舎の狭い一本道では前に行く地元ナンバーの軽自動車を追い抜くのにも苦労している。それでも運よく軽自動車は横道にそれてくれた。

地元の車はいなくなったが、私たちの目の前に大きな緑色のバスが現れた。グラブツーリズムの大型観光バスで、ゆっくり走っている。

タクシー運転手は「前のバスは他県ナンバーなので地元の運転手でないから、道をよく知らないのだから」と言っている。確かにバスは奈良ナンバーで、標高約 700m の雲仙温泉に行く一本道はくねくね曲がっており、そうはスピードを出せない。

それにしてもこのクラブツーリズムのバスは遅い。



【前に行くクラブツーリズムのバス】

「もっと早く走って！」と女性陣から叱咤激励の声が聞こえる。私も思わず「そんなに遅いと今度クラブツーリズムは使わないぞ〜！」と脅し文句を掛けると、車内では笑いと言の喜びの声が響き渡る。運転手も含め、完全に車内はある目的に向かって一体になっている。

なんという結束だろう。久しぶりに感じるチームワーク、スポーツでチーム一体になって目標に向かって突き進んでいるあの感覚だ。

タクシー運転手は再三に渡って狭い山道で追い抜きを掛けようとしている。それを察してか、バスは道の横にある少し広めの駐車場によけてくれた。バスの横を私たちのタクシーが通過して、タクシーの運転手がバスの運転手に向かって手を上げると、相手も手を上げて応えてくれる。双方ともクラクションを軽く鳴らして別れる。

おそらくバスの運転手は、後ろのタクシーが急いでいるのが分かっていたのだから、横によける場所がなかったのだろう。シロちゃんが「クラブツーリズムはまた使ってやるからな〜」と言うと、再び車内では大きな笑いが起こる。

さて邪魔者がいなくなったので、またタクシー運転手が飛ばし始める。しばらくして私たちが乗り遅れたらしい路線バスの背後が見えてくる。「あのバスですかね」と運転手が聞いてくる。私は「おそらくそうでしょう」と答える。私たちは見たことのないものを追っていたことを今になって気が付く。

問題はこのバスを抜けるかだが、そう簡単ではなさそうだ。

実は、私たちが最終的に行きたいのは小浜温泉だが、島原港から小浜温泉行の直行バスはなく雲仙の温泉街でバスを乗り換えることになっている。その乗り換え時間が 7 分間あるので、最悪はこのままタクシーで雲仙温泉まで行けば、小浜温泉行のバスには乗ることができる。

しばらくの間、バスの背後に着いての並走が続く。バス停があっても降りる人や乗る人がいなければバスは停まらない。

そして雲仙温泉の手前で道が多少広くなったところで路線バスが脇によけてくれた。バスの運転手は後ろの車が急いでいるのを知っていたのだろう。タクシーなので無理な追い越しやあおり運転はしないから、どこかで道を譲ろうと考えていたに違いない。

路線バスは追い越したが、外は雨が降っておりこんな山の中で降ろされても困るので雲仙温泉までタクシーで行くことにした。それはタクシー運転手へのねぎらいと感謝の気持ちでもあった。

■春陽館

バスに乗り換え、小浜温泉に到着する。私にとって初めて訪れる温泉だ。

この温泉を3泊目にした理由は、今までの2泊はともに山の中の温泉だったので最後は海に面した潮風香る温泉にしたかったからだ。

パンフレットによると、小浜温泉は「肥前風土記」(753年)に記されている古湯で、海岸沿いに温泉宿が建ち並び、裏路地に入れば古い石垣の昔ながらの風情ある街並みが広がる。30ヶ所ある源泉から立ち昇る湯煙が特徴的で、それは105℃という高い源泉温度と豊富な湯量によるもので、温度と湯量によって求められる熱量は日本一だという。温泉にそんな熱量の評価があることを温泉ソムリエの私としても初めて知る。

小浜温泉の今宵の宿は、バス旅を考慮してバスターミナルに近く、海岸沿いで歴史を感じられる純和風の「春陽館」を予約してある。この宿の本館は昭和12年(1937年)築で相当に古い。

その古い本館にやってくる。風情と威厳のある玄関が私たちを迎えてくれる。

部屋に入ると、普通の古い旅館といった感じだ。部屋の窓からはパンフレットのとおりの風情ある街並みと源泉から立ち昇る湯煙が見える。



【春陽館の玄関】



【部屋から見た温泉街】

何の変哲もない部屋だが、トイレの隣にある扉を何気なく開けたら驚きが変わった。そこは風呂場なのだが、タイル張りの洗い場の隅に狭い浴槽が作られている。それはいかにも取って付けたようで、滑稽と言わざるを得ない。

女性陣を呼んでその風呂を見せると、タツさんは吹き出して笑いをこらえて、「何、これ？」と連発し、コマちゃんは「何これ珍百景に出そうか」などと言っている。

当時としては苦勞して作った斬新なアイデアの風呂場だったのであろう。玄関の風情もいいが、このアンマッチな部屋風呂も捨てがたい。



【部屋風呂】

夕食は海辺の宿、そして老舗旅館だけあって実に充実している。

まずはアワビの踊り焼きが登場する。活きたアワビが跳ねるので網でできた蓋をして焼く。同じ料理を有名な温泉地の高級旅館で食べたことがあるが、山奥の温泉地だったので驚きはするが感激はしなかった。しかしここは海辺の温泉地だから雰囲気も気持ちも違う。もちろん味がいいのは言うまでもない。

海辺なので刺身や小鉢も充実していて、茶わん蒸しはアオサが掛かっており一味違う。



【アワビの踊り焼き】

すき焼きが登場する。もちろん牛肉は柔らかくて美味しい。ただし、このすき焼きは無くてもいいような気もする。初日のかじか庵は宿泊と食事を分離していたが、海辺の宿に来る人は海の幸を望んでいる人が多い。あれもこれもの豪華料理はそろそろ見直し時かもしれない。

しかしそんな戦略的な話ではなくて、その後に出てきた料理が全く意味不明だ。鉢に入ったサラダなのだが、品書きには魚料理と書かれており、これのどこが魚料理なのかとても理解できない。仲居さんに聞くとサラダに魚が入っているから魚料理と言っているとのことだ。確かに小さな白身魚の刺身が入っているが、これはどう見てもサラダだろう。呆れるような驚きのために私は証拠の写真を撮るのも忘れる始末だ。

私はこの少しズレた感覚に、部屋の風呂を思い出してしまった。

私たちが着席してから火を点けた釜めしが炊きあがっており、中には桜エビが詰まっている。赤出汁の味噌汁との相性もよく、デザートの水菓子も上品で美味い。

あれこれ書いたが、この内容で1泊2食付11000円はコストパフォーマンス抜群の宿だろう。

■福岡空港へ

最終日は小浜温泉から福岡空港に行くだけなのだが、実は計画段階では2つの課題があった。

まず、バスターミナル7時40分発のバスに乗らないといけない。それには7時35分には宿を出る必要があるが、宿のHPでは朝食時間は7時30分からになっている。そこで昨晚の夕食時に仲居さんに理由を話して、朝食時間を10分でも早くならないか、あるいはおにぎりでも結構ですと言うと、6時50分にしますと言ってくれた。実にありがたい宿の対応に感激した。

この一件もそうだが、私たちはこの宿に来てから感激だけでなく呆れることや笑いも体験した。しかしそれらはどれもお客のことを考えてのことなので嫌な気持ちはしなかった。むしろ呆れや笑いの方が思い出に残る。そう考えると、ひょっとしたらこれは宿の戦略なのかと思い始めた。これが昭和初期から生き残ってきた老舗旅館の底力なのかもしれない。

次の課題は小浜温泉から福岡空港へはバスはあるが夕方にしかならない。シロちゃんが山形に帰る飛行機は福岡空港 15 時なので間に合わない。小浜温泉から諫早駅までは行けるが、そこからバスが繋がらなかった。

バスが繋がるとか繋がらないとか、この時の私は、完全にテレビのバス旅番組の太川陽介になっていた。

そして番組の中で太川陽介がやるように、私も地図を見ながら考えた。

長崎駅から福岡空港行き的高速バスは多くあり、諫早市はその途中にあるのに諫早駅には寄ってくれない。ただし高速バスは必ず諫早インターチェンジを経由する。ということは諫早駅から市内の路線バスでインターチェンジまで行けば勝機が生まれる。

調べてみると諫早インターチェンジには高速バスが停まるバス停があり、そこから 500m ほど離れて貝津団地入口という市内の路線バスのバス停がある。その 500m を歩けばよい。

これで課題は解決した。

やはり旅の基本は地図だと、改めて認識した。おそらく時刻表だけを見ていたら解決できなかっただろう。

朝 6 時 50 分、宿の配慮で特別に 40 分も早くしてもらった朝食を食べはじめる。

固形燃料の卓上コンロで海苔や干物を網で焼いて食べるので、風情はあるが時間もかかる。蕎麦やイカの刺身もあって、夕食と言ってもいいような朝食になっている。

これは 10 分や 15 分では食べられないから、宿の対応は真っ当だった。私の推理もあながち間違っていないかもしれない。



【春陽館の朝食】

小浜温泉バスターミナルに行くと、通勤通学の人が多く集まっている。小学生が集団登校をする待ち合わせ場所にもなっているようで、その小学生たちを見送って私たちはバスに乗り込む。

12 時前に福岡空港に到着し、空港内のレストランで打ち上げをして解散になる。九州再発見の旅は無事に終了する。

第五章 旅の記録

■温泉評価委員会

私は温泉宿を評価する温泉評価委員会、通称「おひよい」を立ち上げている。それは温泉宿に泊まった時に組織される勝手気ままな委員会で、委員は同行した人になる。何が良かったとか悪

かったとか、あれこれ話し合って評価項目を 5 段階で評価し、委員会として評価値を算出する。ただし今回は私 1 人の意見で決定した。

評価項目は泉質、風呂、料理、コスパ、サービス、建物・部屋、立地環境の 7 項目で、平均値を総合点としている。温泉は泉質と風呂で分けており、立地環境はかつて秘湯度という項目だったが、都市型の温泉もあるのでロケーションや景色を総じて評価するようにした。

評価基準は 5 段階としてその定義は、5 は驚き感動、4 は普通に良い、3 は可もなく不可もない、2 は普通に悪い、そして 1 は失望落胆としている。

長湯温泉「かじか庵」は泉質 5、風呂 4、料理 3、コスパ 5、サービス 4、建物・部屋 4、立地環境 4、総合点 4.14 になった。

湧出温度は 46.6℃、pH は記載なし、泉質はマグネシウム・ナトリウム・カルシウム・炭酸水素塩泉だった。

霧島温泉郷「こしかの温泉」は泉質 4、風呂 5、料理 5、コスパ 4、サービス 3、建物・部屋 5、立地環境 4、総合点 4.29 になった。評価ポイントとして、風呂は露天風呂とサウナを、料理は冷蔵庫の中身を、建物・部屋はグランピングそのものを評価した。

湧出温度は 49℃、pH は 6.9、泉質はナトリウム・炭酸水素塩泉だった。

小浜温泉「春陽館」は泉質 3、風呂 3、料理 4、コスパ 5、サービス 5、建物・部屋 4、立地環境 4、総合点 4.00 になった。

湧出温度は 96.1℃、pH は 8.1、泉質はナトリウム・塩化物泉（等張性・高温泉）だった。

■旅の記録

実施は 2023 年 5 月 28 日（日）～5 月 31 日（水）の 3 泊 4 日、福岡を起点にした行程を以下に示す。私は前泊として友人宅に泊まり、解散後はその日に帰宅した。

- ・ 1 日目 7 時 04 分博多駅バスターミナル、7 時 20 分西鉄天神バスターミナル集合し、高速バスで大分市要町バスターミナルへ、おにぎりを買ってターミナルで朝食、高速バスで竹田玉来へ、バス停前の真正寺を拝観し、近くで農業見学、路線バスに乗り換え 13 時 19 分長湯温泉到着、観光案内所で聞き込み、ラムネ温泉館で立ち寄り入浴、コンビニで買い出し、ガニ湯を見物、丸山公園で乾杯、15 時 30 分「かじか庵」チェックイン
- ・ 2 日目 8 時 30 分宿出発、竹田玉来のスーパーマーケットのイトインコーナーで昼食、11 時 50 分発の高速バスで 13 時 59 分益城インター口到着、スーパーマーケットでサクランボの看板、14 時 59 分益城インター口を出発し 17 時鹿児島空港到着タクシーで移動し 17 時 20 分「こしかの温泉」にチェックイン
- ・ 3 日目 9 時に宿の送迎バスで鹿児島空港へ、9 時 45 分発の高速バスで 12 時 15 分に熊本桜町バスターミナル到着、昼食は「鼎's by JIN DIN ROU 桜町店（ディンズバイ ジンディンロ）」で太平燕（タイピーエン）を食べ、13 時 48 分熊本桜町バスターミナル発の路線バスで熊本港へ

- 熊本港 14 時 50 分発フェリー「オーシャンアロー」で島原港へ
 島原港 15 時 25 分発の路線バスに間に合わず、タクシーで雲仙まで追走し
 雲仙 16 時 10 分発の路線バスで小浜温泉へ、16 時 40 分「春陽館」チェックイン
 ・ 4 日目 小浜温泉 7 時 40 分発路線バスで諫早駅へ、9 時 20 分諫早駅発路線バスで
 貝津団地入口へ、10 分歩いて諫早インターバス亭から高速バスに乗り福岡空港へ
 11 時 53 分福岡空港到着して、打ち上げ、解散

費用は、1 人当り総額 57941 万円になった。その内訳を以下に示す。

- ・ 交通費 1 人当り 16408 円、詳細は以下
 - SUNQ パス 14000 円
 - タクシー 3440 円（鹿児島空港～こしかの温泉 1 人当り 860 円）
 - タクシー 6190 円（島原～雲仙 1 人当り 1548 円）
- ・ 宿泊費 1 人当り 37761 円、詳細は以下
 - かじか庵 9638 円（1 泊朝食付き 7500 円）
 - こしかの温泉 18325 円（全国旅行支援適用後 適用前は 2 食付 21725 円）
 - 春陽館 9798 円（全国旅行支援適用後 適用前は 2 食付 11000 円）
- ・ その他 1 人当り 3772 円（昼食 2 回、飲み物代、ラムネ温泉館入浴料 300 円含む）

この他に自宅～福岡の往復費用として以下の約 26000 円が発生した。

- ・ 往路 スカイマーク 14680 円 自宅→羽田空港 約 600 円
- ・ 復路 ピーチ 6790 円 成田空港→自宅 約 4000 円

参考までに、出発前の行程表（最終版）を以下に掲載する。

九州旅行（5月28日～31日）行程案			2023年5月24日 植木記
日程	行程	宿泊	
28日	博多駅バスターミナル7:04→西鉄天神バスターミナル7:20→9:41大分市要町10:39※→11:50竹田玉来12:21→13:19長湯温泉（※バス予約は0975363371）	長湯温泉かじか庵 大分県竹田市直入町長湯温泉2961 電話0120-118-102または0974-75-2580 和室6帖 朝食付7500円 鮮度が抜群の日本一の炭酸泉	
29日	長湯温泉8:32→9:30竹田玉来11:50→（高速だが座席フリー）→13:59益城インター口14:53→17:00鹿児島空港→18:00宿のバスで宿まで	霧島温泉 こしかの温泉 鹿児島県霧島市隼人町松永2625 電話0995-43-4046 グランピング（6mドームテント+源泉かけ流し露天風呂+テントサウナ）2食付20900円 この価格から全国旅行支援適用	
30日	宿のバス→鹿児島空港9:45→12:15桜町バスターミナル13:48→14:27熊本港フェリー乗り場14:50→フェリー→15:20島原港15:25→16:03島鉄雲仙営業所前16:10→16:34小浜温泉 以上の海路または益城インター口経由の陸路	雲仙・小浜温泉 春陽館 長崎県雲仙市小浜町北本町1680電話電話番号:0957-74-2261 2食付き和室12100円 この価格から全国旅行支援適用 海辺の和風旅館、じゃらん売れた宿大賞3位	
31日	小浜温泉7:40→8:39諫早駅8:43→9:00貝津団地入口→徒歩10分→諫早インターチェンジ10:04→11:53福岡空港（国際線ターミナル）→無料バスで国内線ターミナルへ	青字の高速バス予約済、予約は全て植木圭二。赤字は間に合わない可能性あり、対策要検討。全国旅行支援はワクチンの接種証明は不要になりましたが、公的な身分証明書（コピー不可）必要。	